

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

シンガポールにおけるパイナップル産業の先駆者、リム・ニースン

安里陽子 (岐阜工業高等専門学校准教授)



19年3月、マリン・バレード公共図書館で開催された展示の様子 (筆者撮影)

パイナップルは、シンガポールやマレーシアではパイナップルタルトなどの菓子でも親しまれている果物の1つだ。19世紀後半から20世紀初めのシンガポールやマレーシアの前身のマラヤではゴムの生産が盛んだったことは知られているが、パイナップル(以下、パインと表記)の栽培も行われており、ハワイに先駆けてパイン缶詰の製造も始まっていた。パイン缶詰の製造は、1920年代にはハワイに追い抜かれることになるものの、1910年代ごろまではシンガポールが世界一の缶詰輸出量を誇っていたほどであった。

シンガポールでパイン缶詰の製造に初めて成功したのはフランス人で、1875年ごろのことであった。その後、イギリス人や日本人もパイン産業に参入したもののうまくいかず、やがてパイン産業は華人がほぼ掌握することとなった。シンガポールの華人はゴムのプランテーションで間作としてパインを栽培し、工場を建設して缶詰製造を行っていた。成長の遅いゴムよりも先に収穫できるパインで収益を確保する算段であったようだ。シンガポールでパイン産業に関わった華人には「ゴム王」とも称されたタン・カーキー (Tan Kah Kee / 陳嘉庚、1874~1961年) や、リム・ニースン (Lim Nee Soon / 林義順、1879~1936年) らがいる。

2016~19年にかけて、シンガポールの孫文南洋記念館 (Sun Yat Sen Nanyang Memorial Hall) とリバー・バレー高校の生徒らが合同で企画した巡回展「農村集落の先駆的な開拓：リム・ニースンの遺産 (Pioneering Rural Settlements: The Legacy of Lim Nee Soon)」が開催された。ゴムの木の幹やパインの葉、果実などが目を引く展示スペースでは、シンガポール社会の発展に貢献したリムの人生とその活動の歴史が写真とと

もにパネルで紹介されていた。

リムは、現在の広東省汕頭市出身の父とシンガポールの名門プラナカン家系出身の母のもとシンガポールで生まれたが、幼少時に両親を亡くし母方の祖父母に育てられた。実業家であった祖父や叔父らの姿を見て成長したリムは、イーシュン (Yishun) やスンバワン (Sembawang) などシンガポール島北部を開発してゴムやパイン産業で成功し、パイン王と称された。

イーシュンは元々ニースンという地名であり、リムの名前がその由来となっていた。ニースンは潮州語の発音で、1980年代に華語の発音であるイーシュンに変更された。リムは築いた財産で学校や病院を設立するなど慈善家としての面も持ち、さらには孫文の支援を熱心に行うなど、政治的な活動でも広く知られた人物であった。

上述の巡回展が開催されたのはシンガポールが独立50年の節目を迎えた時期であった。また、植民地期の歴史も含めシンガポールの発展に貢献したプラナカンをとたえる『偉大なるプラナカンたち：50の特筆すべき人生 (Great Peranakans: 50 Remarkable Lives)』という書籍も2015年に発行されており、そこでもリムはピックアップされている。MRTイーシュン駅周辺にある公園には、リムの銅像と地域の歴史を紹介するパネルが設置されている。

24年3月訪問時、直射日光や風雨にさらされたパネルは文字が消えてしまっている箇所もあったが、シンガポール島北部の歴史はここでも、植民地期にゴムやパインのプランテーションを展開し地域を開拓したりリムらパイオニアの歴史とともに語られている。

< 筆者紹介 >

沖縄県生まれ。2001年フィリピン大学大学院修士課程 (フィリピン研究) 修了後、放送記者、雑誌編集者などを経て、17年同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程修了。博士 (現代アジア研究)。同志社大学 < 奄美 沖縄 琉球 > 研究センター研究員、21年10月より現職。米軍占領期の沖縄でブームとなったパイン産業の歴史についての調査を契機に、シンガポールでもかつて盛んだった、華人によるパイン産業の歴史について調査中。